

西野博之さん

●NPO法人フリースペースたまりば 理事長
川崎市子ども夢パーク 所長

「生きてるだけですごいんだ」をモットーに
みんなが助け合える「街づくり」を目指して

神奈川県にある「川崎市子ども夢パーク」所長を務める西野博之さんは、これまで30年以上にわたり不登校の子どもの居場所づくりに関わってきた。生きづらさを抱えた若者たち、子育て中の親や乳幼児など、さまざまな子どもや大人が出会い、共に育ち合う場をつくり続けている。春から始まった全国一斉休校による子どもや親への影響、さまざまな人が出入りする場の感染予防など、ウィズコロナと言われる状況だからこそ、新たに見えてきたこととは――。

●取材文……太田美由紀（ライター）

ここは閉めない
最後の砦として開け続ける

新型コロナウイルス感染症の予防のため、安倍首相は令和2年2月27日、「3月2日から春休みまで、全国の小・中・高・特別支援学校は臨時休校を要請する」と表明した。

川崎市高津区にある「川崎市子ども夢パーク」（以下、夢パーク）の所長を務める西野博之さんは、そのニュースを聞いて

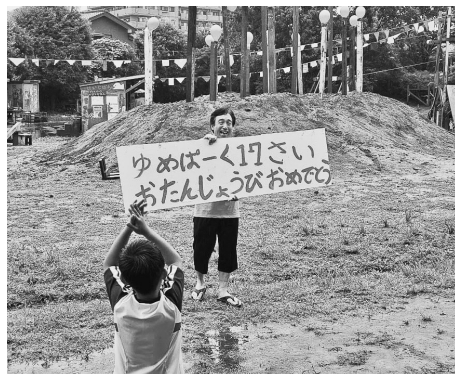
瞬時にこう考えた。

「学校が休校になれば虐待が増える。ここは閉めちゃいけない。子どもや若者の居場所最後の砦として開け続けなければ」

すぐに川崎市に連絡を入れ、閉鎖しない方向で話し合いの場を持った。

「川崎市子どもの権利に関する条例をもとに作った子ども夢パーク。子どもにとって最善の利益は何かを、ともに考えましょう」

川崎市は、国際連合総会で採択された「児童の権利に関する条約」の理念に基づき、



17周年を迎えた日。雨のなかたくさん親子が集まった。誕生日ケーキのろうそくに見立て土の山にたてた大きな棒の先に風船をつけ、泥を投げて割ってお祝い（写真は西野さんのFacebookより）

平成12年12月に「川崎市子どもの権利条例」を制定している。その条例をもとに夢パークが開設されたのが平成15年。西野さんが代表を務めるNPO法人フリースペースたまりばと公益財団法人川崎市生涯学習財団が、協同でその運営を任されてきた。

そこを所管することも未来局青少年支援室の担当者は、その旨を上司とも相談。後日川崎市から発表された文書の中に、「子どもの居場所確保」という文言が明記され、夢パークなど一部の施設は開所を続けるということが実現した。

「川崎市子どもの権利条例」制定から20年、

子どもの権利に関する意識が地域に根つき、「子どもの居場所」の必要性が行政にしっかりと理解された証だろう。

地域の子どもと大人が
関わり合い育ち合う場所

西野さんは、昭和61年から不登校の子どもの居場所づくりに関わり始め、5年後にはアパートの一室で常設の「フリースペースたまりば」を開設。不登校の子どもたちが安心して自由な時間を過ごせる場をつくってきた。モットーは「生きてるだけですごいんだ」。著書『居場所のちから』

にこのような表現がある。

「治療だとか評価・選別といった眼差しからは、ほど遠い場所であり続けた。地域の中で子どもと大人が関わりあい、育ち合ってきた場所なのである」

設立当初は、行政から「民間の話聞く必要はない」と相手にされなかったこともある。それでも長年、多くのケースを抱え、市役所、区役所、医療機関、地域など、さまざまなつながりをつくり続けた。子どもの権利条例策定の際には、調査研究委員会世話人も務め、ひきこもり支援、不登校理解に関する行政の委員も歴任し、活動が続けてきた。

「ずいぶん耕され、必要な声を上げやすくなってきました。行政が動くようになってきた。市長など行政のトップも含めて民間



Profile

●にしひの・ひろゆき●

1960年東京都生まれ。1986年より不登校の子どもの居場所づくりに関わる。1991年、川崎市高津区に「フリースペースたまりば」を開設。2003年にオープンした「川崎市子ども夢パーク」内に市の委託により不登校の子ども・若者の居場所「フリースペースえん」を開設。2006年より施設全体の所長に。川崎若者就労自立支援センター「ブリュッケ」総合アドバイザー。神奈川大学非常勤講師。精神保健福祉士。

とともに悩み、考え、協力するという姿勢になり、手応えを感じています」

夢パークの子どもたちは自分で考えて、やってみる

夢パークは子ども・若者たちが主役の場所だ。大きな敷地には手作りの遊具があり、土を大きく盛った泥んこになって遊べる山がある。安心して集える子どもたちの参加活動拠点、「けがと弁当は自分持ち」の精神で自由に遊べる禁止事項のないプレーパーク（冒険遊び場）、学校に居場所を見出せない子どもや若者が集うフリースペースの3本柱で成り立っている。

公園の遊具が使用禁止となり、全国の子どもたちが遊ぶ場所を失っていたときも、夢パークでは、広々とした屋外で子どもたちが泥んこになって笑顔で遊んでいた。

「開けると決めたからには、合言葉を作りました。『うつらない・うつさない』。入り口に手洗い場を作り、足踏みで消毒できるものを作り、検温する。調子の悪い子は帰ってもらおう。三密を避けて遊びます」

普段から自分たちで自由に考え、「やってみたい」ことにどんどんチャレンジしている子どもたちはたくましい。



「サッカーはぶつかり合うし、白熱すると飛沫が飛ぶから難しいなあ」と説明すれば、子どもたちは新しいルールを考えてくる。パスをしたときは走れるが、ボールを足でキープしている間はみんなが動きを止める『だるまさんが転んだサッカー』を、自分たちで編み出した。これがまた、密にならないし面白い。枝の先に紙で作ったピンクの花をつけて、『ハナれて棒』を提案してくれた子どもいます」

ただ禁止にするのではなく、なぜダメなのか理由を伝えることで、どうすれば遊べるかの試行錯誤が始まる。

「コロナではつきり分かりました。大人はものを考えないで全部禁止。だけども子どもは、どうすればできるかを考えてやってみる。僕たちは子どもたちと一緒に考え続けただけです。休校にする必要があったのかもこれから検証する必要がありますよね」



入り口にはスタッフと子どもたちが作った足踏み式の消毒液。外ではいつものように薪割りに挑戦する子ども。どんな状況でも、ここに来れば夢中になって遊べる

子どもにとって最善の利益とは何かを考える

子どもたちに関わる中で見えてきた親子の生きづらさにも、西野さんはこれまでとことん寄り添ってきた。

「僕はいま、相談業務が多いですね。子育て相談、虐待や自傷などの緊急のものも、親御さんが生きづらさを抱えているケースもあります。貧困、保護者の精神疾患、家庭内暴力、金銭トラブル、さまざまな問題がある。生活保護や児童相談所のケースワーカーさんやひきこもり支援の人たちと

も会議を持っていますし、保健師さんとも関わりがありますよ」（西野）

一斉休校が始まった翌日には、すぐに若いお母さんから電話がかかってきた。

「まじムカつくんだけど。めし三食つくるのありえない。絶対、手出すと思う」

増える家事負担、テレワークで夫が在宅し息を潜めて過ごすストレス、だかららしい子どもを見てヒートアップすることもある。夫婦喧嘩、きょうだい喧嘩、虐待やDVのリスクも一気に高まる。困難を抱える家庭ほどダメージは大きい。

「悲しいことに家庭内の性虐待も少なくあ



お昼ご飯はボランティアの人たちと子どもたちで毎日手づくり。250円で食べられる。西野さんと夢パークのなかを歩くと、子どもたちやお母さん、地域の人と自然に声をかけ合う様子が見られた

りません。昔受けた性虐待のトラウマから自傷する親もいます。夜の街に働きに出て親の虐待から逃げていた子どもも逃げ場がなくなってしまうっている」

夢パークでは、生活保護家庭の無料学習会も、市と話し合って開催を続けることになった。そこでみんなで食べるおにぎりで夕食をまかなう子どもたちもいる。

「川崎市には『子どもの権利条例』があるので、条例をもとに、子どもにとっての最善の利益とは何かを考え、皆さん動いてください。待っていても何も変わらない。僕たち民間は行政のキーパーソン、つまり、

当事者にとって必要なことを自分の問題として頭で考えて行動できる職員を見つけたことが重要です。保健師さんにも、ありとあらゆる地域のリソースを知り尽くし、赤ちゃんとお年寄りまで支えられる方がいる。そんな保健師さんが増えてくれたらいいなと思っています」

みんなが助け合える街づくりを目指して

西野さんは今年60歳。今後やりたいことを尋ねるとこんな答えが返ってきた。

「ホントはね、森のようちえん、自然育児をやりたいの。乳幼児が遊びに来るとエネルギーをもらえますよね。ただ、いまは精神保健やひきこもりのことを何とかしてほしいと求められているから、天職として僕にできることはやっていこうと思います。

でも、ひきこもりも不登校も障害のある子どもたちも、虐待の心配がある家庭の支援もお年寄りも、地域の中でそれぞれが当たり前に受け止められる街づくりが大事。『どう、元気？』『ご飯食べてる？』ってみんなが助け合える街をつくれればいいと思うんです。いま、川崎市と一緒にそんな街づくりを目指して動き出しています」

公民問わず地域の人たちをつなぎ、誰もが安心して暮らせる街をつくる。西野さんの目指すところは、まさにこれからの保健師にも必要な視点ではないだろうか。